



日本海海戦を
転機とした男たち

2

秋山真之 「天才」と称された若き参謀

「秋山以上の適任者は心当たりがない。官は低い、彼を私の後任にすることを切望する」

こう述べたのは、連合艦隊の先任参謀だった有馬良橘です。明治三十七年（一九〇四）二月六日に日露戦争が始まり、旅順閉塞作戦を第一回、二回と指揮してきた有馬ですが、健康を害して離脱せざるを得なくなる、後任として秋山真之を推しました。

海軍兵学校十七期の秋山真之が、連合艦隊の作戦を担う「先任参謀」となったのは、三十七歳のとき。当時、第一艦隊参謀長には海兵七期の加藤友三郎、第二艦隊先任参謀には十四期の佐藤鉄太郎などが配置されており、彼らと比較しても、秋山は非常に若かったといえます。

なぜ、若年の秋山が連合艦隊先任参謀の大役に抜擢されたのか。それは、彼が欧米留学中に書いた、明治三十一年（一八九八）の米西戦争におけるサンチャゴ・デ・キューバ海戦の軍事レポートがきっかけでした。



上：秋山真之
(国立国会図書館蔵)

戦隊司令官・島村速雄は、「その観察の鋭さと見識の高さ、文章の簡潔で、文章の簡潔巧妙なることに

驚嘆敬服し「と評して

います。そして、レポートは海軍幹部や連合艦隊司令長官・東郷平八郎の目にも留まったのです。

日本海海戦で、連合艦隊を勝利に導いた名参謀の秋山ですが、彼の優れているところは、作戦立案面だけではありません。レポートが示す通り、彼は文才にも秀でていたのです。

有名な電文「天気晴朗なれども波高し」はもとより、連合艦隊解散式において東郷平八郎が読み上げた訓示「聯合艦隊解散之辞」は、秋山が起草したものといわれています。

年長者を憚ってか、戦時中、秋山の名が表立って報道されることはほとんどありませんでした。前任の有馬の名前が頻繁に報道されていたことを考えると、秋山は意図的に黒子に徹していたように見えます。

しかし日露戦争終結後、秋山が生み出した言葉は、人々を釘付けにしました。「勝つて兜の緒を締めよ」「丁字戦法」「七段構えの戦法」……それらの革新的なフレーズの数々をうけ、世間は若き参謀を「天才」と称したのです。



日本海海戦で旗艦として戦った戦艦「三笠」は、大正15年（1926）に記念艦となり、現在の位置に固定されました。

「三笠」入口で「本誌を見た」と言われた方は入艦料を100円値引きします（一般のみ）。

入艦料	区分	一般	シニア	高校生
1名	一般	600円	500円	300円
	20名以上	500円	500円	200円

観覧時間	4月～9月	3月・10月	11月～2月
	9:00～17:30	9:00～17:00	9:00～16:30

